



よつば会だより

2020年9月号

発行:NPO法人

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原東 2丁目 17-86

TEL・FAX 0848-37-6600

やっと9月になりました。今年の8月は、例年になく記憶に残る月となりました。新型コロナウイルスへの感染がなかなか収まらず、むしろ増加傾向となっており、お盆の帰省ラッシュも姿を消しました。また、8月の後半は異常なほどの暑さの日が続いて、熱中症で病院に運ばれる人が例年になく多かったです。この熱中症とコロナ感染の症状が似ていることが不安をより大きくしています。9月は穏やかな月になることを期待したいのですが、また、何か思いがけない騒ぎが起きるのではないかと、疑心暗鬼になりそうです。



自立を支援してくれる専門家の必要性



7月に行った「よつば会家族教室」に、統合失調症の娘さんを抱えるお母さんが初めて参加されました。娘さんは発症して20年近くが経過、その間お母さんは娘さんのために、できる限りの助力を行ってききましたが、現在も状況は落ち着いていないということでした。次回も家族教室に参加するというお母さんに対し、どのようにアドバイスをしたらよいかを考えるために、「みんなねっと」が発行している「精神障害者家族 相談事例集」を開いてみました。そこで見つけたのが、「自立を支援してくれる専門家の必要性」というタイトルの相談事例でした。事例の相談者は70代の母親、15回の入退院を繰り返している50代の娘さんのことでの相談でした。相談内容の要旨を次に示します。

「私たちも高齢になり、支援力もなくなってきました。このまま入院してほしいという気持ちと、退院して何とか一人で暮らすことができないかという気持ちで、毎日悩んでいます。相談支援事業所にも相談に行きましたが、相談員さんも本人の気持ちが大事といわれます。しかし、当の本人は相談することは何もないと言います。病院や行政などにも相談したのですが、一律的な対応で、きちんと向き合ってくれる支援者に出会えません。結果的には母親の私が頑張らなければならないと言われ、疲れてしまいます。本当は私ができないから何とかしてほしいと思うのですが、間違っているのでしょうか」

この相談に対する家族相談員(家族会の会員など)からの回答は次のような内容でした。

「家族が一生懸命に頑張っても本人への対応をしても、家族の力には限界があります。しかも、本人との距離も近いので、とかく冷静な判断が難しくなります。そこで、福祉サービスを利用したいと思っても、本人から必要ないと言われれば、何もできなくなります。家族にも本人にも、困ったときにいつでも相談に乗ってくれて、一緒に考えてくれるような人が必要だと考えています。私たち家族も同じ問題を抱えていますので、一緒に考えていけると思っています」

この相談事例を取り上げたのは、「家族にも本人にも、困ったときにいつでも相談に乗ってくれて、一緒に考えてくれるような人が必要」ということを、日頃から強く思っていたからです。相談に乗ってくれるところは、いくつかあると思います。相談事例の相談者も、相談支援事業所、病院、行政などに相談に行っています。しかし、本人が何か具体的にやりたいこと、例えば、作業所に行きたいなどを持っていないと、相談は途切れてしまうでしょう。親としては、そこで途切れてしまうのではなく、本人の気持ちを聞き出して、福祉サービスにつなぐようなところまで、一緒に考えてくれるような人を求めていると思います。そこで考えられるのが、家族相談員の回答にある「私たち家族も同じ問題を抱えていますので、一緒に考えていけると思っています」というところです。ここでいう「私たち家族」というのは、家族会を指していると思います。よつば会では、家族教室の開催が家族会の集まりでしょう。よつば会の家族教室を、不安を抱える家族に対して、時間をかけて一緒に考えていく場にしていきましょう。

8月の活動報告

- 09日 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 30日 家族の SST (市民センターむかいしま)

9月の活動予定

- 13日(日) 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 26日(土) よつば会家族教室 (市民センターむかいしま)





～ 障害当事者を抱えた家族の苦労や悩みなど～ 体験から得たものを次に生かそう



よつば会家族教室への参加者が少なくなっていることを、よつば会だより先月号に書きました。新型コロナウイルスへの感染不安も手伝ってのことだと思いますが、ちょっと寂しい気分になっています。そこで、家族教室の意義、役割を再認識しようと、私が精神保健福祉士の国家試験に向けて学習したテキストを開いてみました。テキストは B5 サイズで、一冊250ページ前後のものが16冊ありましたが、その中の「精神保健福祉士養成講座 精神保健福祉援助技術各論」を引っ張り出し、索引から「家族」を見つけ開いて見ました。すると、「精神障害者の家族の苦労、生活上の問題」というところに、次のような記載を見つけました。

「一般的に精神障害者の家族の抱える苦労や悩みには次のようなことが挙げられる。

- ① 家族も精神病について無関心、無理解、偏見を持つ一人であった場合が多い。
- ② 身内の変調にも、一時的なことか病気であるか否か、他に原因があるのかと逡巡する時間が長く、治療に結び付けるまでに相当長い時間を要する。
- ③ この間家族構成員の苦痛、生活上の問題は深刻化していき、次第に一人の家族(多くの場合母親)にその世話の責任が集中していく。家族関係の崩れにつながることもある。
- ④ 治療に結び付けるのにも多大な辛苦を味わう。再発時も同じである。
- ⑤ 精神病と診断された時のショックは大きく、受け入れるのに相当の時間を要し、また、主に世話をしている家族は、自責の念にかられる。
- ⑥ 近隣、世間に隠すことに気を配りながら暮らすようになり、付き合いがおろそかになる。
- ⑦ タイムリーに相談できない、しない。相談しても解消、軽減、解決に向かわないことが多い。また、家族の望む援助、支援と、提供する側のずれが生じたり、時には傷つけられ、相談援助、支援を受けることに無力感を感じさせられている家族もいる。
- ⑧ 一時的な小康、緩和を得るにしても、多大な努力を必要とする。努力が報われないことも多い。
- ⑨ 病気や治療、リハビリテーションに関する情報不足や患者への対応方法に不安を持っている。
- ⑩ 退院を促されても、住む家、仕事、日常生活の世話、急変時の対応など家族の努力を超えた問題が山積み、受け入れられない。就労に結び付く移行プログラムや働ける場が少ないことに、あきらめ気味となる。
- ⑪ 長期にわたる経済的負担で生活困難を抱えている家族が多い。
- ⑫ 親自身が、高齢、病気である家族も多く、自分自身のことにも社会的サービスを必要としている」

以上、精神障害者の家族が抱える苦労や悩みが12項目記載されていました。その12項目の一つ一つを、私自身のたどってきた状況や、家族教室などでの家族の方々の話を重ねて思い起こすとき、この12項目はそのすべてが「そうだった」もしくは「今でもそうだ」ということばかりでした。テキストは初版発行が平成19年1月でした。12項目は13年前に書かれたこととなります。13年前と現在では、精神障害福祉もかなり改善されて来ています。しかし、自分の子が精神病と診断された時のショック、また、その前後の戸惑い苦しみなどは、これからも絶えることなく繰り返されていくことになるでしょう。私自身がそうであったように、ほとんどの人は子が精神病を抱えることになるなど夢にも思うことなく、また、精神病に対する知識も全くと言っていいほど無いままに、子の変調に直面するのですから。

そこで思うことですが、よつば会会員の皆様も、子の発病に直面してきています。その体験を通して、初めて子の病気に対面した方の不安や悩みを少しでも和らげるアドバイスをすることができると思います。「よつば会家族教室」はそうしたアドバイスをさせていただく場です。多くの会員の方々に家族教室に参加していただきたいと願う意味の一つです。(N.T)